



# 味の夫婦

昭和三十八年九月二十日 印刷  
昭和三十八年十月五日 発行

定価 二八〇円

著者 土岐雄三  
発行者 豊島清史  
印刷者 菅生定祥

発行所

株式会社 光風社

東京都千代田区神田錦町三ノ一四  
電話 東京(三三)〇二三八番  
振替 東京 五六五二六番

落丁乱丁は御取換いたします

土 岐 雄 三



KOFUSHA



# 目 次

夫は友情のために散歩に出かけることもある

七

夫は子供のようにねかしつけられるものではない

二四

夫はいつもびくびくしている

四三

夫は隣りの大掃除の手伝いに行く

六〇

夫は妻の為に、敢えてそれを云わない……

七七

大人はみんな不潔である

九四

パパがパパならママもママ

一二

男と父親の間

一三六

愛情は一図ないさかいから

一四四

それでも妻は倖せか？

一六〇

夫はそんなわがままもいう

一六一

男と女しかないンだから

一六二

夫が妻とたたかうとき

一六三

夫が妻から逃げ出すとき

一六四

この新しきもの

一六五

さみしくないというけれど

一六六

それはじぶんで知るものだ

一六七

装  
幀  
  
岡  
村  
夫  
二



夫は友情のために散歩に出かけることもある

1

「おとうさん……電話ですよ」

もうかれこれ四、五年前のことになるが、十二月に入つて間もない、ある日曜日の午後であつた。

私は、玄関わきの二畳に、机をすえて、例によつて締切ぎりぎりというせつばつまつた仕事に、アブラ汗を流している最中だつた。

唐紙<sup>からかみ</sup>をあけて、顔をみせたのは、カミさんである。

「誰からだい？ K社か……」

私は訊ねた。仕事が難航<sup>なんかう</sup>しているときは、やたらに気が立つて、怒りっぽくなる。

チキ生め、このいい天気の日曜に、こんなおもいをさせやがつて、と思うと、そんな電話をとり  
ついでくるカミさんにまでつい<sup>はら</sup>腹がたつた。

ひるま銀行につとめる<sup>かみ</sup>僕、ものをかき出してからもうやがて二十年以上にもなるが、執筆<sup>とらびつ</sup>という  
仕事には慣れるどころか、やればやるほどむずかしくなり、思うように筆がうごかない時のいらだ  
たしさなどは、<sup>とし</sup>齢と共にだんだんひどくなるようであつた。

「——もう支店長ぐらいになれば、なにもそんなに無理して原稿かきなんかしなくても、ちゃんと  
やつていけるンでしょう」

カミさんはよくそんなことを云つた。

私は、平凡な生活がいちばん好き、と口ぐせのようにいう彼女の心底は、私が原稿だ、締切だ、  
といつて<sup>ほねみ</sup>骨身を削つて徹夜<sup>てつや</sup>などをするのが、ただ、阿呆<sup>おほう</sup>らしく、バカげたことのように思えるので  
あろう。会社の同僚<sup>どうりょう</sup>が、釣<sup>つり</sup>だ、ゴルフだといつて休日を愉<sup>たの</sup>しんでいるとき、ねじ鉢巻<sup>はちまき</sup>で机に噛<sup>か</sup>りつ  
いている亭主の姿など、どうみても気に入る<sup>かうきう</sup>嗜好<sup>しこう</sup>のものではないらしかつた。

「仕事中は、電話をとりつがなくてくれつて云つてあるだらう……」

私は、廊下<sup>ろうか</sup>を歩きながら云つた。

「誰だか訊いたか？」

「さア……女の人の声でしたよ」

「女？」

私は、胸のへんになにかつまつたような気がした。原稿の催促<sup>おびき</sup>なら、S社のW君か、K社のS君にきまつている。

「——誰だろうな……」

私は、電話のおいてある茶の間に行つた。

なにも、女からの電話ときいただけでうろろろする理由はないわけだが、それがその理窟通りにいかないというのも、三十年近い夫婦生活の間に屢々<sup>しばしば</sup>おこつた数々の、雨、風、あらしの余波<sup>よは</sup>みたいなものが、いつも胸の底に沈んでいたせいかもしれない。

丈夫でピンジャンしている健康体でも、レントゲン写真をとつてみると、むかしの古傷が、くろい影になつて残つていているという。云つてみれば、まアそんなものだ。

私はテレビの傍に置いてある受話器をとりあげ、カミさんはさり気なく台所へ立つて行つた。

「もしもし」私は、よそいきの聲を出した。四分の不安と六分の期待の入りまじつた、妙におちつかない気分である。

「あ、もしもし、土岐<sup>どき</sup>さまでいらつしやいますか……」

受話器の奥から聞えてきたのは、つやのある若い女の声だ。しかし私には、ぜんぜん聞きおぼえがなかつた。

「はア……土岐ですが」

私は、それとなく、台所の方をみた。カミさんは、ガス台の前に向うを向いて立つていた風呂桶に水をはつている水道の音で電話の話はきこえそうもない。

「もしもし」私は勢込んで云つた。

「どなた？」

「こちら、宮内みやうちの代理でございますが……土岐さまでいらつしやいますか？」

「宮内？」

宮内という名前の知人は一人あつた。

「はア、あの鎌倉の……」

「ああ、サブちゃん……」

「もしもし」相手の女性が云つた。

「ちよつとお待ち下さいませ……」

私は、はぐらかされたような氣持になつた。声の主は、顔も名前もしらない人だつたのである。

——お出いになりましたな——という女の声に続いて、

「あ、雄ちゃんか……」と、今度は聞きなれた宮内三郎の野太いバスが受話器の奥からひびいてきた。

「なんだい今頃？」

私は云つた。

「どこにいるんだ？」

「うん……それがね……」

いつもの彼らしくもなく、なにか云い<sup>ぎ</sup>減んでいる風だ。

「家<sup>きや</sup>じゃないんだろ……どこだい、東京かい？」

「いや……大宮だ……」

「大宮？」

私は、思わず、一オクターブほど高い声を出して、

「大宮つて、埼玉県のか？」

「そうだよ……君<sup>きみ</sup>ん家のそばだす」

「ふうん……なんだつてまたそんなところにいるんだ？　一人か？」

「うん……いまはね……」

その、いまはね、という云い方に、意味があるらしい。

「誰だい？　いま、出た女のひと……」

「女中だよ、ここの……」

「女中？ なンだい、そこは？ 宿屋か？」

「うん……ま、そういつたところだ」

大宮の旅館ときいては、察<sup>さつ</sup>しのつかぬ私でもなかった。

「泊つてるのかい……そこへ？」

「うん……ゆうべ泊つた」

宮内三郎は、まるつきり元気がない。青菜<sup>あおな</sup>に塩<sup>しほ</sup>というしおれ方だ。大の男が、と思うとなにかしら可笑<sup>おかし</sup>さがこみあげてきて、思わず私は笑つた。

「いやに元気がないな……どうしたンだ」

「うん……」

彼は、そういつてから、二、三秒黙つた。

「SOSなんだよ……」

「え？」私は、訊<sup>き</sup>き返した。

「なんだつて？」

「金が足りないンだ……たのむよ」

「よせやい、どういうことなンだ、いつたい……」

「会つてからゆつくり話すよ……たのむから、とにかく金を持って来てくれないか」

「いくらぐらい持つてけがいい？」

「そうだな……三、四千元あればいいだろう」

私は、旅館の名前と、だいたいの見当をきいてから電話を切った。

「なんだ……サブちゃんじゃないか」

台所から茶の間に入つてきたカミさんに聞かせるともなく独りごちて、

「金<sup>かね</sup>五千元ほど出してくれ……ちよつと、そこまで行つてくる……」

私は、多くを語らなかつた。宮内三郎は、私の幼馴染<sup>きょうなじみ</sup>であり、悪友である。私自身がそうであるように、宮内三郎もよからぬ亭主の一人なのだ。

詳しい事情は、電話で聞かれなかつたが、あらましのところは見当もつく。

大宮公園の池の傍の旅館とあるからには、云わずとしたアベック専用の旅館であらう。そんなところへ泊り込んだあげく、金が足りなくなつたなどという事態は、どうせ人に云えないテイタラクに違いない。私は、いぶかしげにしているカミさんに、着物をきせてもらい、うしろから帯をしめてもらった。

「じきに帰ってくるからね……K社から電話があつたら、ちよつと散歩に出たといつてくれ……」

私は、そう云つて家を出た。

宮内三郎と私とは、年齢も生立ちも略々似通っていた。二人とも、東京の下町で育ち、同じ小学校と中学校に通った。

私は彼をサブちゃんと呼び、彼は私を雄ちゃんと呼んだ。彼も私と同じように、お調子で、意志がよわく、気が小さいくせに、向うみずなところがあつた。

あんた方は、まるで兄弟みたいね、と、子供の頃、家に遊びに来てゐる彼と私を見くらべて、よく母などが云つたものだが、全くすこし甘つたれなところも、涙つぽいところも、せかせかと気ぜわしいところなども、全部ひつくるめて、一つの餅を半分に割つたようだとよくひとに云われたものである。そんなにして育つたわれわれも中学卒業前後、恰度あの関東の大地震を境に、二人は全く別の方向に足をむけることになった。私がA学院の商科に入学した頃、彼の家は一家をあげて満洲に渡つた。

そして、二人が再会したのは、終戦直後、あの闇市の雑沓の中であつた。

「おい」と、その時、彼はだしぬけに私の肩を掴んで云つた。

「君、雄ちゃんじゃないか……」

私は、その男が、宮内三郎だと気がつくまでに、三秒と要しなかつたと思う。



「ああ……サブちゃん」

二人は、ふかしまんじゅうだの牛の煮込だのを並べたせまい屋台の間の露地に向い合いに立つて、暫くものが云えなかった。

私は彼の中に、四十年という年月の経過を見、彼は私の中に、四人の子供の親という中年男を見出したのであった。

「どうしたい？」

と、彼は云った。

「うん……君こそ、どうしたい？」

それが、二人が交した二十年ぶりの挨拶であり、その短い言葉の中に、二十年の空白は完全に充たされていた。

「いま、どこにいる？」

私は、彼が満洲で職を得、そこで結婚し、一家をなしているというニュースを風のたよりで聞いていた。戦時中は、満鉄の傍系会社の重役のようなこともやり、一時は仲々の羽振りだつたと聞いている。

「鎌倉だ……女房の実家があつちにもあるもんだからね……」

「子供は？」